

哲学〈H04A〉

配当年次	全学年
授業科目単位数	4
科目試験出題者	土橋 茂樹
文責(課題設題者)	土橋 茂樹
教科書	基本 土橋 茂樹『哲学』(中央大学通信教育部)

《授業の目的・到達目標》

「哲学」という学問の基本的な考え方や振舞い方を、哲学史上に登場する主だった思想の流れを理解していくことによって、身をもって体験してもらうことが第一の目標。さらに、そこから、理解内容を整合的に体系化しなおす仕方を修得してもらうことが第二の目標です。

《授業の概要》

私たちは日常、ごく当たり前と思っていることの枠の中で、平凡かもしれませんが安定した生活を営んでいます。しかも、そうした常日頃慣れ親しんでいる「ものの見方」というものを、それ自体問い直す機会は滅多にありません。ところがそうした常識的なものの見方の系統だった問い直しこそ、哲学の主戦場となるのです。想像力と論理だけがそこで許された武器です（さらに受講生には、途中であきらめない知的粘り強さが要求されます）。

もともと「哲学」とは、西周たち洋学者たちが古代ギリシア語に起源をもつ「フィロソフィア」（「智慧の愛好すなわち愛知」という意味）を「希哲学」ないしは「希賢学」（つまり「賢くあろうと願う学問」の意）と翻訳し、やがて「希」の字が脱落してできた明治期の新造語です。しかし、実は西周からさらに 300 年ちかく遡った 1595 年、天草で刊行された『羅葡日辞典』において、philosophia の項目には、日本語の意味として「学問の好き、万物の理を明らむる学問」と記されていたのです（実際にはローマ字で書かれています）。「哲学」という語感に比べて、「学問の好き」という表現のなんとストレートでわかりやすいことでしょうか。

「学問することの喜びを愛好すること」、それこそが哲学の原動力となっているのです。大学で学ぶということのうちには、様々な実用的な目的があると思います。しかし、そのように学問を学ぶこと自体の喜びや愛好心へと立ち戻ってみることも大切なことではないでしょうか。その上で、この講義での「学問を愛好すること＝哲学すること」の実践を通じて、哲学の諸概念や諸学説を自分自身の「知の道具」として体得してほしいと願っています。

《学習指導》

この科目を履修する際に、あらかじめ学習しておくのが望ましい科目を挙げれば切りがありません。しかし、各自の好奇心の赴くままに関心のある書物をよく読み、その内容について自分なりに考えてみる事ができれば、特にこれとこれが必須の科目だというようなものではありません。むしろ、二度三度テキストを読んだくらいでは理解できないような事柄が世の中にはたくさんあるということを思い知るような体験を大切にしてください。

《成績評価》

試験（科目試験またはスクーリング試験）により最終評価する。

哲学〈H04A〉

- ◎課題文の記入：不要（課題記入欄に「課題文不要のため省略しました。」と記入すること）
- ◎字数制限：1 課題あたり 2,000 字程度（作成基準のとおり）

第1 課題

アリストテレスはイオニア（ミレトス）学派に哲学の始まりを見出したが、①彼らの考えのどのような点がホメロスやヘシオドスらと異なり、「哲学」的であったのか、また、②ヘラクレイトスとパルメニデスが彼らの考えをそれぞれどのように発展・継承していったのか、以上2点に（必ず2点両方に）明確に答え、かつそれらを関連づけるようにして述べてください。

第2 課題

プラトンがいわゆる「イデア論」を主張するにいたった①動機、②そもそも「イデア論」とはどのような教説か、③後期においてプラトン自身が見出したイデアの問題点にはどのようなものがあるか。以上3点に（必ず3点すべてに）明確に答えながら、プラトンの「イデア論」について述べてください。

第3 課題

アリストテレスの倫理学の特徴を、「幸福（エウダイモニア）」「徳（アレテー）」「人間は自然本性的にポリス的動物である」という二つの用語と一つの文章を（必ずこれら3点すべてを説明した上で）互いに関係づけるようにして述べてください。

第4 課題

ヘレニズム哲学におけるストア派、エピクロス、アカデメイア派のそれぞれの特徴を（必ず三者すべてについて）説明し、さらにそれぞれがローマ哲学にどのように受容されたかを述べてください。

〈推薦図書〉

*教科書を熟読さえしていれば十分解答可能なレポート課題です。